中国明代私家園林拙政園の初期庭園構成に関する史的考察

A Historical Study on the early design of Zhuozhengyuan (Humble Administrator's Garden)

as a Chinese private garden in Ming dynasty

孫旻愷、藤井英二郎

Minkai Sun, Eijiro Fujii

千葉大学大学院園芸学研究科

Chiba University, Graduate School of Horticulture

Key Words: 1. 中国明代 2. 拙政園 3. 初期庭園構成 4. 意匠

1. China Ming dynasty 2. Zhuozhengyuan (Humble Administrator's Garden)

3. Original garden composition 4. design

1. 背景と目的

中国園林は皇家園林、寺院園林、私家園林と大きく三種類に分けられる¹⁾。私家園林に於いては、揚子江(長江)下流区域にある園林群が最も名高く、「江南園林」とも言われ、賞賛されている。拙政園はその江南園林の代表として、中国四大名園の一つとされ、1997年に世界遺産に登録された。

拙政園は中国明代(1368-1644)中期(16世紀初頭)に初代園主王献臣によって造られた園林であり、名画家文徵明がその設計に携わったと言われている。明代以降、江南園林では、園主が有名な画家や詩人などに設計を依頼することが常態化していた²⁾。文献上では明確に文徵明が設計者であるとの記録はないが、拙政園を主題とした彼の絵画や文章などが数多く残り、拙政園の敷地選定と地形造成などの設計理念についての記述が見られることから、文徵明が拙政園の設計に関与したことは明らかと云えよう。

劉敦楨(1979)は文徵明によって書かれた『王氏拙政園記』(嘉靖12年・1533)と王献臣への手紙の内容を元に、拙政園は正徳4年(1509)から同8年(1513)の間に造られたと推定している³⁾。張橙中(1995)は初期の拙政園の庭園空間構成を推定し、鳥瞰図を作ったが、意匠に関する検討はなされなかった。谷光燦(2010)は拙政園の対聯や扁額などの意匠について考察したが、主に現存しているものを中心とした研究であり、16世紀当時の拙政園の庭園構成や意匠については深く触れなかった。Sun et al (2012)⁴⁾は拙政園初期の植栽構成について考察したが、全体構成や意匠には触れなかった。

中国の明代園林を考察するためには、16世紀初頭における拙政園の初期の設計意匠及び庭園構成を検討する必要がある。よって本研究は、既往研

究を踏まえつつ、拙政園の現状と初期の拙政園に関わる文章、絵画、詩歌などの史料をあわせて検討、分析し、拙政園の初期の庭園構成と設計意匠を考察することにした。

2. 拙政園の園主と設計者

2-1 王献臣

『明史』には、王献臣が蘇州出身であり、弘治6年(1493)に進士の号を得、後に御史に抜擢され、都へ赴任したが、人事に対する軍の不当介入や他の政治闘争に巻き込まれ、たびたび左遷されたと記述されている。彼はエリート層出身で良好な教育を受け朝廷に職を得た中国の伝統的価値観において模範のような前半生と、明代の陰悪な政治闘争に心身が疲れ隠居を志した後半生を過ごした明代士人と考えられる。

2-2 文徵明

文徵明(1470-1559)は蘇州出身の画家、作家、書道家である。父は御史である。正徳16年(1521)、文氏は朝廷の職に就いたが、3年後に退職して故郷に帰り、自分の絵画を売って生計を立て、絶大な人気を博していた。彼は後に絵画史に於いて明四大家に数えられた。

王献臣、文徵明はともに蘇州出身で、エリート層に属した。二人の父はともに官僚で、自身も官僚になり、複雑な政治闘争で朝廷に失望して自ら官僚を辞め、故郷に帰還し隠居した。こういう一連の共通点をもつ二人が拙政園の造営をきっかけに、長年にわたって付き合うことになったと考えられる。

3. 拙政園の成立と推移

正徳4年（1509）、都から地方に左遷された王献臣は父の死をきっかけに、朝廷に退職を求めた。許可されたあと、彼は故郷蘇州に戻り、拙政園を造った。

拙政園が位置する区域は後漢時代から蘇州のエリート層の私宅地として度々使われ、数々の文人がここで園林を造ったとされる⁵⁾。王献臣はその跡地を買収し、拙政園を造った。当時拙政園は「拙政園廣渺二百餘畝茂樹曲池勝甲吳下」⁶⁾と讃えられ、当時の名士たちが集まる名所となった。

拙政園は王献臣の死後、その所有者や所有範囲が変動したが、1954年蘇州市園林管理局は王献臣

所有当時の範囲のほぼすべてを管理するようになって今に至る（表1）。

4. 立地条件

拙政園は、今から2500年前の春秋時代に造られた蘇州城内の東北に位置する。蘇州城は中国で2番目に大きい太湖の東側にあり、太湖の水は多くの水路を経て、東シナ海に注ぐ。『王氏拙政園記』には「槐雨先生王君敬止所居在郡城東北界婁齊門之間居多隙地有積水互其中稍加浚治環以林木」と記述され、その立地は低湿で湿潤な区域と判断できる（図1）。

表1 拙政園の推移

時代	年号	西暦	所有者	土地利用			事項	出典	時期
				西部	中部	東部			
明	正徳元年	1506	大宏寺所有	荒地			荒地	(明)『姑蘇誌』	第一期
	正徳4年~正徳8年	1509~1513	王献臣	拙政園(王献臣及び息子)			王氏が拙政園を建て始める『蘇州古典園林』劉敦楨の推測	劉敦楨『蘇州古典園林』	
	不詳	不詳					王宥が『拙政園賦』を作成	(明) 銭谷『呉都文粹続集』	
	嘉靖11年	1532					仇英が『園居図』を作成	(明)仇英『園居図』	
	嘉靖12年	1533					文徵明が『文待詔拙政園図詠』『王氏拙政園記』を作成	(明)文徵明『文待詔拙政園図詠』『王氏拙政園記』	
	嘉靖30年	1551					文徵明が拙政園八景を作成	(明) 文徵明『拙政園八景』	
	不詳	不詳	王献臣の息子						
	不詳	不詳	徐氏				王献臣氏の息子が博打で徐氏に所有権を譲った	(清) 徐樹丕『識小録』	
	崇禎4年	1631	王心一				拙政園(徐氏)	帰田園居(王心一族)	園東部荒れた田何十畝を買い、園林を造った。帰田園居と名付けたのは文徵名の子孫文震孟である
	不詳	不詳	王永寧	駙馬府(王永寧)	中部と西部で大規模の改装工事を行った	(清) 銭泳『履園叢話』			
康熙18年	1679	朝廷	蘇松常道新署	中部と西部が改修された	(清) 徐乾学『憺園集』				
康熙23年	1684			康熙帝が中部と西部を遊覧	(民国)『呉県誌』				
康熙35年	1696			柳遇が『蘭雪堂図』を作成	(清) 沈潜徳『蘭雪堂図記』				
清	不詳	不詳	蔣榮	書園(葉史寛)	復園(蔣榮)	中部を購入	(清) 沈潜徳『復園記』		
	不詳	不詳	葉史寛			西部を購入	(清) 顧震濤『呉門表隠』		
	咸豊10年	1860	李秀成	忠王府		中部東部及び周辺部分の改修で職人数百人が年中無休で働いていた。城が乗っ取られた時はまだ完成されていなかった	(清) 馬如飛『劫余灰録』		第三期
	同治2年	1863	李鴻章	江蘇巡撫行轅		善後局が三千銀で元園主呉氏から中部を買収	(清) 世勛『八旗奉直会館記』		
	同治3年	1863				園内の物事の十分の五が壊れた	(清) 趙烈文『能静居士日記』		
	同治10年	1871	張之万					遠香堂、蘭畹、玉蘭院、柳堤、東廊、琵琶塢、水竹居、菜花楼、煙波画舫、芍薬坡、月香亭などの景が建てられた	
	同治11年	1872	張之万等	補園	八旗奉直会館(園名は拙政に復旧)	三千銀で政府から中部及び全部の屋敷を購入、修理費二千銀で修理	(清) 世勛『八旗奉直会館記』		
	光緒3年	1877	張履謙			西部で大規模の改装工事を行い、塔影亭、留聽閣、浮翠閣、笠亭、与誰同坐軒、宜雨亭、卅六鴛鴦館、十八曼荼羅花館などが建てられた	範煙橋『拙政園誌稿』		
	光緒13年	1887	張之万等			廊が長し、清い泉水が地面に溜まり、水面が交差し、山々が立派である	範煙橋『拙政園誌稿』		
	中華民国	民国17年	1919	政府	奉直会館		臨時防疫病院として使われた	範煙橋『拙政園誌稿』	
民国23年		1928	禁煙センター				範煙橋『拙政園誌稿』		
民国26年		1946	国立社会教育学院	校舍	中部は事務と教学区 屋敷は宿舍 東部はグラウンド	範煙橋『拙政園誌稿』			
中華人民共和国		1951	蘇南区文物管理	拙政園			全体修復	範煙橋『拙政園誌稿』	第四期
		1954	蘇州市園林管理局				東部を再建	劉敦楨『蘇州古典園林』	
		1997					世界遺産に認定される

図1 蘇州と太湖・揚子江の位置関係 google map より

図2『姑蘇城図』（清 乾隆10年）に見る拙政園と周辺

乾隆10年（1745）の『姑蘇城図』（図2）に記された拙政園の範囲を現在の拙政園、博物館・駐車場などの範囲（図3）と比較すると、現況の園林範囲は当時に比べて東北部、北西部、西部で縮小されていることがわかる。

5. 初期庭園構成

5-1. 敷地構成

現在の拙政園の西南には清代の住宅遺構を活用した園林博物館、蘇州博物館があり、王献臣の私宅地であった時期の構成は明らかではないが、恐らくここが住宅部分であったと推定される。

図3 拙政園・博物館等の範囲と周辺現況図 google map より

図4 拙政園の現状の敷地範囲と景 『拙政園遊覧冊』より

現在の拙政園にはほぼ南北に仕切る塀が二つあり、それらによって庭園は三つの部分に分けられているが、『文待詔拙政園図詠』の絵画に塀は見られないことから、初期の拙政園にはそのような仕切りはなかったと考えられる。

『王氏拙政園記』には、園西部の水面について「混漾渺彌，望若湖泊」と記述され、『文待詔拙政園図詠』の意遠臺という景の絵では意遠臺の西に広い水面が描かれている。その絵に添えられた詩では意遠臺は池が北へ曲がる部分にある高台と記述されている。現在、中部の水面は西部との間を仕切る塀を境に西部に入ると北へ広がる。そして、その東に緩やかな斜面を持つ低い土山がある。これらの位置関係は文徴明の意遠臺の描写と一致することから、この土山が意遠臺の痕跡である可能性が大きいと推定される。

『王氏拙政園記』には、拙政園の池が南に曲がる角から拙政園の南東隅までの距離が100歩(1歩=1m)と記述されている。現状の拙政園東部は1950年代以降造られたもので、初期と異なる構成になっているが、東部の池の西端は中部の池の東端に合わせて造ったと思われる。その部分から園の南境界までの距離はおおよそ100mであり、初期の拙政園の記述と合致する。よって、東部の敷地範囲は初期と変わっていないと推測される。

以上のことから、現在の拙政園の池の形状や敷地範囲は初期の構成を留めているところが多いと判断される。

5-2. 景の位置の推定

『文待詔拙政園図詠』には文徴明が描いた初期拙政園の31景の絵がある。ここではそれらの絵を元に、『王氏拙政園記』などの文献資料とあわせて分析し、初期拙政園の各景の位置及び周辺環境を推測する。

17世紀に書かれた中国現存最古の造園書『園冶』では「凡園圃立基、定庁堂為主」⁷⁾とあり、庭園における庁堂の重要性が述べられている。

『王氏拙政園記』に記される庁堂は若墅堂だけであり、『文待詔拙政園図詠』には「若墅堂在拙政園之中」とあり、若墅堂は拙政園の中心にあることがわかる。また、『園冶』では「堂者、当也。謂正当向陽之屋」⁸⁾とあり、堂は真正面から日が当たらなければならないと書かれている。つまり庭園内の堂は真南へと向くべき建物と考えられている。よって若墅堂は南を正面とする建物の可能

性が大きいと考えられる。

『文待詔拙政園図詠』には若墅堂が描かれた絵は二枚ある(若墅堂、小飛虹)。小飛虹の絵(図5)に添えられた文章には「小飛虹在夢隱樓之前、若墅堂北、横絶滄浪池中」とある。また、同文には夢隱樓の位置について「南直若墅堂」(若墅堂が(夢隱樓の)真南にある)とある。よって、若墅堂の北に小飛虹があり、小飛虹の北に夢隱樓があると推定できる。そして、小飛虹の景を描いた絵の中央に位置する橋が小飛虹と判断される。

小飛虹の絵の左側に描かれる建物の下部は、樹冠に遮られているものの二階の欄干に当たる部分が確認できることから楼と判断される。また、『文待詔拙政園図詠』によると園内の楼は夢隱樓だけであることから、この絵に描かれる楼が夢隱樓と推定される。そして、小飛虹の絵の右手の建物が若墅堂で、その北面が描かれていると判断される。

図6の若墅堂は図5の若墅堂とその構成はよく似ているが、堂前に池はなく平庭になっており、そこに立つ2人の人物が描かれている。したがって、図6は若墅堂の南面が描かれているものと判断される。これは庭園の中心をなす堂が南面するとする前述の『園冶』の記述からすれば、若墅堂の景を描いた絵においてその南面が描かれていることになり首肯できる。そして、この絵では堂の背後・北側に城壁が描かれている。前述したように拙政園は蘇州城内の東北部に位置することから、この絵に描かれる城壁は北の城壁と推定される。

図5 小飛虹 『文待詔拙政園図詠』より

図6 若墅堂 『文待詔拙政園図詠』より

『王氏拙政園記』に「軒北直夢影」とあり。『文待詔拙政園図詠』に「倚玉軒在若墅堂後旁多美竹面有昆山石」とある。以上の記述から倚玉軒は若墅堂の北西にあり、現況の位置とほぼ変わらないと判断される。また、繁香塢の位置について「堂之前為繁香塢」とあり、繁香塢は若墅堂と住宅部の間の区域と推測される。

『王氏拙政園記』の夢影樓の記述の後「循水西行岸多木芙蓉」とあり、『文待詔拙政園図詠』に「芙蓉隈在坤（南西）隅臨水」とある。このことから芙蓉隈は夢影樓の南西側の水辺にある景と推測した。また、滄浪亭の位置について『王氏拙政園記』に「（芙蓉隈の）又西中流為榭」とあり、芙蓉隈の西にあると考えられる。

志清處は『王氏拙政園記』に「經竹而西出於水滢」とあり、『文待詔拙政園図詠』に「志清處在滄浪亭之南稍西」とある。前述したように滄浪亭は芙蓉隈の西に位置していたことから、志清處はさらに西側に位置していたと推測した。また、『王氏拙政園記』には志清處の後が「至是水折而北」とあることから、その位置は中部と西部の境界にあると推測される。

『王氏拙政園記』には園の西部について「滉漾渺彌、望若湖泊」とあり、園西部は滄浪池を中心とし、広々とした空間構成であったと推定される。

園西部の景の一つ、水花池の位置について『文待詔拙政園図詠』には「往北地益迴林木益深水益清駛水盡別疏小沼」や「水花池在西北隅」とある。よって、水花池は園西部にある滄浪池とは異なる小池と考えられる。また、浄深(深静)という景について『文待詔拙政園図詠』には「深静亭面水花池」、『王氏拙政園記』には「池上美竹千挺可以

追涼中為亭」とある。よって浄深(深静)は水花池のすぐ近くにある竹林に囲まれた小さい亭子と考えられる。浄深(深静)の絵(図7)を見ると、絵の上部に竹林と亭子、下部にハスが植えられている小さい池が描かれている。亭の中で二人が床に腰を下ろしている。上述の記述と合わせてみると、この絵に描かれた亭子が浄深(深静)であり、池は水花池であると推察できる。

図7 浄深(深静) 『文待詔拙政園図詠』より

柳隩は『王氏拙政園記』に「夾岸皆佳木其西多柳」とあり、『文待詔拙政園図詠』に「在水花池南」とある。このことから柳隩は滄浪池の最西端位置したと推測される。

『王氏拙政園記』に釣の位置について「（意遠）臺之下植石為磯」とあり、前述した意遠臺の下に位置していたと推測される。

待霜亭は『王氏拙政園記』に「循浄深而東」とある。また、聴松風處の位置については「（待霜亭の）又東出夢隱樓之後」とある。このことから待霜亭は浄深(深静)と夢隱樓の間に位置していたと考えられる。『文待詔拙政園図詠』に「待霜亭在坤（南西）隅」とあり、『王氏拙政園記』の記録と矛盾するが、本研究では景が順次に記録されている『王氏拙政園記』が正しいと判断した。

『王氏拙政園記』では、西部の景が順次に記述された後に「又東出夢隱樓之後長松數植」とある。このことから、聴松風處の景の位置は夢隱樓の後ろにあると推測される。

『王氏拙政園記』に怡顔處について「（聴松風處の後）自此繞出夢隱之前」とある。このことから、その位置は夢隱樓の東にあると推測される。

『王氏拙政園記』には園東部について「水流漸細」とあり、またリンゴが植えた来禽園や梅を植

えた瑤圃が存在することから、東部は植栽を中心とした区域と考えられる。

来禽園の位置について『王氏拙政園記』には夢影樓の記述の次に「又前循水而東、果林彌望」(更に水辺に沿って東へ行けば、果樹林が見える)とある。よって来禽園は園中部に位置する夢影樓の東側に位置すると推定できる。また、『文待詔拙政園図詠』には「来禽園滄浪池南北雜植林檎數百本」とある。よって、来禽園は滄浪池の南と北に数百本のリンゴ樹が植えられた大きな果樹園と考えられる。同文では来禽園の次に桃花汧の記述があり、その景の位置について「桃花汧在小滄浪東、折南」(桃花汧は滄浪池の東にあり、そこで池が南へ曲がる)とある。つまり、桃花汧の位置から水流は北から南へ流れる。前述したように来禽園の果樹は池の南北両側に植えられていたことから、その位置は桃花汧の西側と判断できる。

来禽園の絵(図8)には来禽園の外側の様子が描かれ、一面の塀が確認でき、塀に門がある。来禽園は園内にありながら、他の部分と区切られ、独立空間として造られていたことがわかる。また、同じ文徴明が作成した『拙政園八景』にも来禽園の絵(図9)がある。この絵には一人の男性が林檎園の中で働いている様子が描かれ、周りに多数のリンゴ樹が描かれている。以上の資料から、来禽園はリンゴの木が群植され、範囲は夢影樓の東側から滄浪池が南に曲がる場所までの数十畝であり、池の両岸広がったと考えられ、かなり規模の大きい果樹園であったと思われる。

図8 来禽園 『文待詔拙政園図詠』より

得真亭という景について『王氏拙政園記』に「園縛盡四檜為幄」((来禽)園で四本の檜を結んでテン

トを造った)、『文待詔拙政園図詠』には「得真亭在園之艮隅」(得真亭は園の東北隅にある)とある。従って、得真亭は来禽園の北側の部分にある景と考えられる。そして、得真亭は檜を支柱にして、布を張ったテントであり、恒常的な建物ではなく、樹木に囲まれた仮設的な施設である。

図9 来禽園 メトロポリタン美術館所蔵『拙政園八景』より

得真亭を描写した後、『王氏拙政園記』には玫瑰柴の位置について「亭之後為珍李阪其前為玫瑰柴」((得真)亭の後ろは珍李坂その前は玫瑰柴)、『文待詔拙政園図詠』には「玫瑰柴匝得真亭」(玫瑰柴は得真亭を囲んでいる)とある。柴は柵の意味も兼ねることから、玫瑰柴は得真亭を囲むローズ⁸⁾の生垣と考えられる。

『文待詔拙政園図詠』に「薔薇径在得真亭前」とあり、薔薇径が得真亭の南に位置していたと考えられる。

湘筠塢は『王氏拙政園記』に「(桃花)汧之南為湘筠塢」とあり、桃花汧の南に位置する竹林と考えられる。

湘筠塢の後に『王氏拙政園記』に槐幄の位置について「又南古槐一株」とあり、湘筠塢の南にエンジュが植えられていたと考えられる。

『王氏拙政園記』に槐雨亭について「其(槐幄)下跨水為杠逾杠而東」とあることから、その位置は槐幄の東にあると推測される。

爾耳軒は『文待詔拙政園図詠』に「爾耳軒在槐雨亭后」とあることから、爾耳軒は槐雨亭の北に位置していたと考えられる。

芭蕉檻の位置について『文待詔拙政園図詠』に

「芭蕉檻在槐雨亭之左」とあり、芭蕉檻は槐雨亭の東に位置していたと考えられる。

『文待詔拙政園図詠』に「竹澗在瑤圃東夾澗美竹千挺」とあり、『王氏拙政園記』に「瑤圃在園之巽（南東）」とある。以上の記述から、竹澗は拙政園の南東隅に位置していたと推測される。

『王氏拙政園記』の最後に記述される景は瑤圃と嘉實亭である。そこには「瑤圃在園之巽」（瑤圃は園の南東部にある）とあり、『文待詔拙政園図詠』には「植江梅百本」（中に百本の梅が植えられている）とあって、その開花時の様子を「花時燦若瑤華」（梅花は瑤池の花のように綺麗）と記述し、仙境に見立てられている。瑤圃の絵（図 10）には竹または木の矢来垣に囲まれた梅園が描かれている。

嘉實亭について『文待詔拙政園図詠』に「嘉實亭在瑤圃中」（嘉實亭は瑤圃の中にある）とあり、嘉實亭は瑤圃の中の亭子と判断される。絵（図 11）には築山の中腹にせり出すように建てられた亭子が描かれ、梅林を俯瞰する亭子であることがわかる。

図 10 瑤圃 『文待詔拙政園図詠』より

以上のように、文献と絵図を比較分析し、位置関係が言及されていない玉泉を除き、『文待詔拙政園図詠』に記録された 30 の景の位置を推測し、初期拙政園の景の平面配置を現在の拙政園の実測図に加筆し、初期拙政園の景の平面配置推測図を作成した（図 12）。

図 11 嘉實亭 『文待詔拙政園図詠』より

5-3. 全体構成と景の配置

現況の拙政園には 33 景（世界文化遺産蘇州拙政園導游手冊より）が存在している（図 4）。そして、庭園は中部、西部、東部に区分されている。そこで、『王氏拙政園記』に記述される初期拙政園の 31 景と現況 33 景の関係を検討した。

初期と同じ命名で同じ位置に存在していると判断される景は倚玉軒だけで、小飛虹、得真亭、待霜亭、嘉實亭は同じ命名の景は存在しているが、位置は『王氏拙政園記』の記述と異なっている。

表 2 拙政園中部の初期と現存する景の比較

注：ゴシックは初期の景が同位置、同名称で現存する景を表す。下線は、初期と同名称の景が現存するものを示す

初期拙政園中部の景	現在の拙政園中部の景
若墅堂、夢隱樓、繁香塢、 倚玉軒 、小飛虹、芙蓉隈、小滄浪、聽松風處、怡顏處	綠綺亭、梧竹幽居、海棠春塢、繡綺亭、玲瓏館、聽雨軒、 <u>嘉實亭</u> 、遠香堂、 <u>倚玉軒</u> 、待霜亭、雪香雲蔚亭、荷風四面亭、見山樓、香洲、 <u>小飛虹</u> 、得真亭、小滄浪、玉蘭堂

表 3 拙政園西部の初期と現存する景の比較

初期拙政園西部の景	現在の拙政園西部の景
志清處、柳隩、意遠臺、釣、水花池、淨深、待霜（亭）	与誰同坐軒、笠亭、倒影樓、浮翠閣、留聽閣、卅六鴛鴦館、十八曼荼羅花館、宜兩亭、塔影亭

表 4 拙政園東部の初期と現存する景の比較

初期拙政園東部の景	現在の拙政園東部の景
來禽園、玫瑰柴、得真亭、珍李阪、薔薇徑、桃花汛、湘筠塢、槐幄、槐雨亭、爾耳軒、芭蕉檻、竹澗、瑤圃、嘉實亭、玉泉	秫香館、天泉亭、放眼亭、芙蓉榭、涵青亭、蘭雪堂

図 12 初期拙政園 31 景の推定位置図 注) 現況測量図に加筆し、作成した。

1. 若墅堂 2. 夢隱樓 3. 繁香塢 4. 倚玉軒 5. 小飛虹 6. 芙蓉隈 7. 小滄浪 8. 聽松風處 9. 怡顏處 10. 志清處 11. 柳隩 12. 意遠臺 13. 釣 14. 水花池 15. 淨深 16. 待霜 17. 來禽囿 18. 玫瑰柴 19. 得真亭 20. 珍李阪 21. 薔薇徑 22. 桃花汭 23. 湘筠塢 24. 槐幄 25. 槐雨亭 26. 爾耳軒 27. 芭蕉檻 28. 竹澗 29. 瑤圃 30. 嘉實亭

現在の拙政園の 33 景はすべて建築物と関連ある景であるが、初期拙政園の 31 景のうち建築物と関係ある景は 11 景（若墅堂、夢隱樓、倚玉軒、聽松風處、待霜（亭）、得真亭、槐雨亭、爾耳軒、芭蕉檻、嘉實亭、滄浪亭）である。

以上のことから、初期拙政園は現在の拙政園より建築物がはるかに少なく、自然風景を基調とした庭園であったと推定される。

若墅堂が存在した位置に今では拙政園の主要な建物である遠香堂が存在しているが、空間構成上では若墅堂と同じ堂であり、同じ機能を持っていると考えられる。夢隱樓の位置には現在建物がなく、夢影樓が位置した中島の頂部に雪香雲蔚亭が新たに建てられている。嘗て若墅堂と夢隱樓を繋いでいた橋、小飛虹も異なる場所に移され、また小滄浪が存在したと推定される区域に現在は荷風四面亭がある。現在の中中部は初期と比べて、建造物の位置や数、様式に変化は見られるが、初期の地形はある程度保たれていると考えられる。

一方で西部は清末に大きく改造され、初期の状態から大きく変貌したと思われる。現在西部に浮翠閣(図 4 参照)という建築物が存在しているが、その基礎となる築山は清末に眺望塔を建てるために盛られたと言われている⁹⁾。また、現在浮翠閣の南に島状築山が存在し、この島と浮翠閣の間に狭い水路が形成されているが、『文待招拙政園図詠』にある意遠臺(図 13)など西部の景の絵には広い池の風景が描かれ、築山や水路などは描写されなかった。従って初期に築山はなく、平坦な地形で、池が広がっていたと考えられる。

『文待招拙政園図詠』と『王氏拙政園記』には拙政園の北西及び西の景は記述されているが、南西については記述がない。31 景の絵図にも南西方面は描かれていない、従って、初期拙政園の南西部には景がなかったと思われる。恐らく 1533 年当時南西方面はまだ整備されてないが、何らかの理由で造園に不適合だったと思われ、現段階の資料では判断し難い。『文待招拙政園図詠』に記述さ

れた西部の建物は淨深と待霜の2つの亭子で、文徵明は西部の他の景を記述する際に必ず西部の主な構成要素である滄浪池について触れるが、この2つの景に関する記述では触れなかった。『王氏拙政園記』には淨深について「往北地益迴林木益深水益清駛水盡…可以追涼中為亭曰淨深」とあり、西部の主な空間から離れていると推測でき、比較的独立性が高いと思われる。

図13 意遠臺 『文待詔拙政園図詠』より

『文待詔拙政園図詠』に待霜の周りに「旁植柑橘數本」とある。橘について『晏子春秋・内篇雜下』に「橘生淮南則為橘，生於淮北則為枳葉徒相似其實味不同所以然者何水土異也」という著名な故事があり、以来橘は環境の善悪の人間に対する影響の比喩として使われてきた。待霜の位置は初期拙政園の中部と西部の堺にあり、上述の橘の意味を含めて考えると意匠上の境界線でもあったと思われる。

東部の景観では激しい改造によって原型を留めていないため、現況と関連付けた検討は困難であった。『文待詔拙政園図詠』によれば、東部には4つの建物があり、その内の2つは亭子で、槐雨亭は隣に槐幄と名付けられた景（槐の老木）に因んで建てられたと『文待詔拙政園図詠』にあり、また同文に「八月文場懷往事」とある。園主の王献臣の号は槐雨先生であることから、この槐の老木を自分自身に重ね、この亭子で自分の人生を顧みようとしたものと推測できる。嘉實亭は前述したように瑤圃という梅の景を鑑賞するために建て

られたものである。

槐雨亭と嘉實亭がこのように周囲の景と強い関連性を持っていたのに対して、爾耳軒と芭蕉檻については他景と関連付けた記述が見当たらず、構成上、他の景とは距離があるように思われる。『文待詔拙政園図詠』には爾耳軒について「吳俗喜疊石為山…未能免俗」とあり、本心ではないが地元のしきたりに従っただけだと表明している。芭蕉檻は文字通り周りに芭蕉が植えられている建物である。中国では芭蕉を文人のシンボルとして使う習慣があり、この景は園主自らが文人である事を表明している景であると思われる。

よって、爾耳軒と芭蕉檻は園主の積極的な造園意図というよりは、慣習を重視して設けられた受動的な景とも言えることから、故意に離れた場所に造られたとも推定できる。

6. 意匠

初期拙政園の意匠は、園名や園内各景の命名に表れていると判断されることから、『王氏拙政園記』や『文待詔拙政園図詠』の記述や景に関わる詩や短文を分析する。

若墅堂の命名は唐代にこの地域に隠居していた農学家陸龜蒙を訪ねた詩人皮日休の詩句「曠若郊野」に由来し、彼はこの地域は城内にありながら郊外のように広々としていて、極上の隠居地であると歌った。これも王献臣がこの地域を隱棲の地と定め、友人で画家の文徵明に設計を依頼し拙政園を造営とした一因と判断される。

『文待詔拙政園図詠』の夢隱樓の文に「君嘗乞靈於九鯉湖夢隱隱字及得此地」と記され、王献臣が嘗て占いを受けたとき隱という籤を引き、その直後に退職を強いられたことから、拙政園を造って隱棲するのは天の導きであるとの認識も伺われ、宿命論の色彩が見られる。

園内の池と池内にある亭は滄浪と命名され、『王氏拙政園記』には「凡諸亭檻台榭皆因水為面勢」と記されていることから、この池に対する命名はこの庭園意匠の基調になっているものと思われる。滄浪という語はもともと中国にある川の名称で、およそ2300年前、有名な詩人屈原の詩集『楚辞』の「漁父」第七「滄浪之水清兮 可以濯吾纓 滄浪之水濁兮 可以濯吾足」の句により、世間という象徴的意味を持つようになった。さらに宋代に退職を強いられた官僚蘇舜欽が「滄浪」という庭

園を造り、憤りの詩を著した。この後、滄浪には汚い世間から逃れるという意味合いが強まったとされる。¹⁰⁾ 王氏が前述の屈原の詩句に書かれた濁った滄浪での行動を模して、滄浪池で足を洗う場所を作り、そこを志清處と命名していることから、社会に対する強い不満の感情が読み取れる。

『文待招拙政園図詠』の繁香塢の文に「高情已在繁華外靜看遊蜂上下狂」とあり、世の中で功名を求める人々を狂っているハチと見立て、自分自身は冷静に傍観とする隠棲の決意が見受けられる。また、倚玉軒に植えたタケを玉と称し、名高い隠者「竹林七賢」を意識した景と思われる。小飛虹の詩文に「愿揮塵世從琴高」とあり、塵世と絶別するとする隠棲の決意が見られる。芙蓉隈にモクフヨウとハスが植えられ、古代中国では屢々ハスをミズフヨウと称し、清らかな君子の象徴として使われてきた。この景は政治世界から脱却して隠棲する君子に見立てられたと考えられる。庭園の最西端に位置する柳隴の詩文に「不向長安管離別」とあり、都から惜しみなく離れるとする政治世界に対する怒りと失望が感じ取れる。意遠台は柳隴の向かいに位置し、その詩文に「曠然心目清」とあり、世間から離れたことで気分が清々しいと説いて、隠棲の決意が感じられる。釣に「須知續綸者不是羨魚人」とあり、園主が功名より自由を求めていることが表現されている。水花池と淨深に「不聞車馬過時野人留」とあり、政治と関わらず隠棲する意志が込められている。

聽松風処に「彼美松間人何以陶弘景」とあり、怡顔處の文に「眇庭柯以怡顔」とある。隠棲生活が健康にいいと唱えた。

來禽園に「珍重筠籬分贈處」とあり、文人仲間とのやり取りが描写され隠棲生活の楽しさをアピールした。得真亭の文に「竹柏得其真」とあり、隠棲によって「真」を得たと謳歌した。

桃花汧にモモが大量に植えられ、その詩文に「常疑有隱家」とあり、桃花源と見立てられたと考えられる。玫瑰柴、薔薇徑の文に「野人緣經擷群芳」とあり、湘筠塢の文に「中有遺世人琴樽自容與」とあって、世間から離れた理想郷への憧れが見られる。槐幄、槐雨亭に「老來不做南柯夢」、竹澗にタケが多数植えられ、前述した「竹林七賢」に因んだと考えられる。

また、前述したように瑤圃、嘉實亭は仙境に見立てられ、園主の仙境への憧れが見られる。

以上の景はいずれも世離れに関連する命名だが、拙政園のすべての景がこういう志向に結び付いているわけではない。王氏が拙政園内にあった泉を、都にいた官僚時代に気に入っていた泉に因んで玉泉と命名し、官僚時代を懐かしむと同時に、蘇州のエリート層として自分の官僚経歴を誇る気持ちが垣間見られる。また、都から良質なスモモを移植し、珍李坂と命名した景にも玉泉と同じ意図が伺える。

『王氏拙政園記』には「此亦拙者之為政也…同時之人 或起家至八坐 登三事 而吾僅以一郡悴老退林下 其為政殆有拙于嶽者 園所以識也」とある。すなわち、同期の官僚たちがみな重役になり、自分だけが退職を強いられたのは政治家として拙いためであり、そのことに基いて園名を「拙政」にしたと記述している。その文にはさらに潘岳(247-300)という中国古代の文人が政治闘争に負け、命まで落としたことが言及されている。『晋書』の第五十五卷には彼は元康6年(296)に隠居の文章を著したが、政治に未練があったため、ついには殺されたと記録されている。王献臣は潘岳の文を使って園名を拙政にし、自分をあざ笑うような意味を込めて、自身の不遇と当時の政治の実態に対する批判を表し、さらに潘岳が隠居を徹底しなかったために命を落したことから、自らは二度と政治活動に復帰しないという意味合いも込められていると思われる。

以上の分析から、拙政園の意匠には王献臣の世間に対する怒りと失望、隠居に対する憧れ、宿命論的な考え方、官僚経歴に対する自慢が混在していると考えられる(表8)。

表8 初期拙政園の景とその意味、背景

景	意味、背景
滄浪池(亭)、志清處、柳隴、待霜	世間に対する怒りと失望
若墅堂、繁香塢、倚玉軒、小飛虹、芙蓉隈、意遠台、釣、水花池、淨深	隠棲への決意
夢影樓	宿命論的な考え方
聽松風処、怡顔處、來禽園、得真亭	隠棲生活の謳歌
桃花汧、玫瑰柴、薔薇徑、湘筠塢、槐幄、槐雨亭、竹澗	理想郷に対する憧れ
瑤圃、嘉實亭	仙境に対する憧れ
珍李坂、玉泉	官僚経歴に対する自慢
爾耳軒、芭蕉檻	慣習への重視

各景の位置と意味、背景の関係をみると(図14)、

世間に対する怒りや失望を意味する3景はすべて西部に位置し、隠棲を意味する11景の内、7景は中部に位置し、4景は中部と西部の境界に位置していた。また、理想郷を意味する9景は東部、仙境を意味する2景は南東部に位置していた。従って、景は意味や背景によって集約され、配置され

たとえられる。つまり、西部に世間、中部に隠棲、東部に理想郷、南東部に仙境がそれぞれ配置されたと推定できる。宿命論を表した夢影楼は前述したように、王献臣が隠棲を宿命と認識していたことから山居ゾーンを構成する一部と分類できる。

図14 初期拙政園の景の配置から推定される4つのゾーン及び『王氏拙政園記』における景の描写順序
注) 現況測量図に加筆し、作成した。

文徴明が著した『王氏拙政園記』に見られる拙政園の景の描写順序を初期拙政園の景の配置と推定される4つのゾーンに加筆すれば、図14の矢印のようになる。この順序を設計者が想定した遊覧順路と仮定すると、拙政園の遊覧順路は中南部—西部—中北部—東部—東南部の順になる。中南部から始まるのはそこが住宅部に近接することから首肯できる。また夢影楼を境に隠棲への決意を意味する景が中南部に配置され、隠棲生活を謳歌する景が中北部に配置されたことから、意匠的に隠棲への決意—隠棲する理由（世間）—隠棲生活の謳歌—理想世界への憧れ—仙境への憧れという順序になる。このような遊覧順序は園主王献臣が来訪者に庭園をもって自分の人生観、世界観を語り

かける手段であり、自らの人生が表現された自伝でもあると言えよう。初期拙政園の31の景やこれらの景で構成された4つのゾーンもこのような意図に基き設計されたと考えられる。

明代、清代には隠棲庭園が多数造られた。それらの庭園のテーマは拙政園と同じ隠棲であり、隠棲に纏わる園主や設計者の意思が庭園で表現されていると考えられるが、本研究ではそれらの庭園の構成や意匠と拙政園との異同については検討できなかった。今後の課題としたい。

7. 結論

本研究は初期拙政園の庭園構成を推測し、庭園意匠を考察した。結論として、明代私家園林拙政

園の庭園構成は現存する庭園の構成とは大きく異なるものと推定された。初期の拙政園は現在よりはるかに建築物の数が少なく、一方植栽の種類・数量は現状より多く、自然の風景が強調された庭園であったと推定される。また、初期拙政園は現存のものより空間に一体性があり、それぞれの景は設計意図に応じて配置・構成されていたと推定された。個々の景の命名に込められた意匠及び植栽の象徴意味によってそれぞれの主題が表現され、さらにそれらの主題が設計意図に従ってデザインされ、一定の順序で組み合わせられることによって、中南部の景に隠棲への決意、西部の景に世間、中北部の景に隠棲の謳歌、東部の景に理想郷、南東部の景に仙境の空間がそれぞれ構成されていたと判断された。このように構成された初期の拙政園は、園名である「拙政」に込められた園主の世間に対する怒りと失望、隠棲への決意と宿命論的考え、理想郷、仙境に対する憧れ、が表現され、それらが庭園の起点から中南部、西部、中北部、東部、東南部へと辿ることによって遊園者に伝わる園林であったと考察した。

参考及び引用文献

1. 周維權 1999 中国古典園林史 清華大学出版社
2. 曹林娣 2005 中国園林文化 中国建築工業出版社
3. 劉敦楨 1979 蘇州古典園林 中国建築工業出版社
4. Sun M., FUJII, E. 2012 Historical Study on the Planting Design of the Early Stage of Zhuozhengyuan (Humble Administrator's Garden) as a Chinese Private Garden during the Ming Dynasty IFLA Asia-Pacific region conference 2012
5. 拙政園誌稿 1986 蘇州市地方誌編纂委員会辦公室 内部発行
6. 張德夫 皇甫昉 2006 長洲県誌 広陵書社
7. 計成 上原敬二 1975 園冶 — 読みと解説付き 加島書店
8. 文震亨 1984 長物誌 江蘇科学技術出版社
9. 張岫雲 2005 補園舊事 古吳軒出版社
10. 季進 2007 Landscape and Imagination: Spatial Poetics of the Surging Waves Pavilion 論文争鳴 7, 121-128

摘要

拙政園は中国蘇州にある庭園である。中国4大名園と言われ、1997年に世界遺産に登録された。拙政園は中国明代(1368-1644)に官職を辞任した初代園主王献臣によって造られた園林であり、名画家文徵明がその設計に携わったと言われている。文献資料によれば、庭園の建造時期は1509年から1513年の間である。500年余りの歴史の中で、拙政園は度々改修された。現況と初期構成が大きく異なっている。本研究では、初期拙政園に関わる文献、絵画、地図などを分析、その庭園構成、意味を推測、考察した。

Summary

Zhuozhengyuan (The Humble Administrator's Garden) in the city of Suzhou beside Taihu Lake is one of the four most famous traditional Chinese gardens in China and it was proclaimed UNESCO World Heritage Site in 1997. There are old writings indicating that the garden was established in the between 1509 and 1513 by the retired bureaucrat Wang Xiancheng and the garden was designed by the owner's friend who is famous painter Wen Zhengming. This garden has over 500 years long history of during which renovated many times. The current configuration of the garden is quite different from the original composition. The aim of this study is to reveal the original design and the concept behind the garden. For this purpose, analysis of related literature, articles, Ink wash painting and maps was performed.